

## 2015年度入学式 式辞

本日、尚絅学院大学、尚絅学院大学大学院の入学式を迎えられた皆さん、まことにおめでとうございます。心よりお祝いを申し上げ、歓迎をいたします。学部入学生の皆さんのほとんどは、四年前のあの大地震の際にはまだ中学生だったと思いますが、震災後の様々な試練を乗り越えて勉学に励み、今日の栄えある入学の日を迎えられた、その地道な努力と、高い志に、心から敬意を表します。またそのような若い、ひたむきな歩みを見守り、時には厳しく、また時には温かく支え、導いてこられたご家族の方々におかれましても、今日まで長い道のりだったと思います。心からのお喜びを申し上げます。

尚絅学院は、明治二五年に、米国から派遣された宣教師によって設立されて以来、一二三年の伝統のある学校です。尚絅とは、絅を尚えるということで、中国の古典にある「衣錦尚絅」（錦を衣て絅を尚う）という言葉から採られたものです。内には錦を着て、つまり人間の内面を磨いて、しかしそれを絅、つまり薄い衣で包んでひけらかさない、そういう謙虚な生き方の大切さを述べたものです。それは、さらに、既存の価値観やその時々の見かけの評価にとらわれない、聖書の示す自由な精神でもあります。

本学はそのような「自らを磨き、そこから他者と共に生きることを志す」、そういう人間の育成を建学の精神とし、永い伝統に根差すと同時に、二〇〇三年に、男女共学の四年制大学として新しくスタートした、若い大学でもあります。本学の教育の特徴は、次の四点にあるということが出来ます。

その第一は、キリスト教の精神を土台とする人間教育ということです。本学は、教育理念として、尚絅学院の建学の精神に則り、キリスト教の精神と豊かな教養によって、内面をはぐくみ、他者への愛と奉仕の心をもって、社会に貢献する人間を育成することを掲げています。

このことについては後で少し詳しく触れたいと思いますが、これと密接に関連する第二の特徴は、総合的な人間力の養成ということです。本学は、キリスト教の精神のもと、多面的で総合的な人間理解を得ることができるよう、幅広い学問分野を、一つの学部・一つの研究科のもとに、ゆりが丘のコンパクトな統合キャンパスで展開しています。そのメリットを生かして、他の学科・専攻の学生や先生方と共に学び、活動する機会を積極的に活用してください。

第三の特徴は、実践性ということです。本学は、社会に貢献する人間を育成するということを、設立当初からの教育理念として位置づけています。そのため、「実践を通して学ぶ」ことをモットーとし、問題解決型の実習・演習や、インターンシップなどを通じ、社会に貢献する実践的な力の育成を目指しています。

第四の特徴として、第一、第二の特徴と関連することですが、学生と教職員の身近な距離感を挙げることができます。本学は学生数約二千名、決して小規模とは言えませんが、対話型の少人数での教育を重視し、教職員と学生が、互いに顔が見える関係を大切にしています。これも、長い伝統の中で受け継がれてきた、本学の独特の校風となっています。

さらに、今年度からスタートする新しいカリキュラムにおいては、これらに加えて、持続可能な東北の地域社会を創り出す力を持った人材の育成を重視しています。また、海外の大学や留学生との交流や、フィールドワークなどを通じ、地域とつながり、グローバルな視野で活躍するための学びの機会にも、積極的にチャレンジしてくれることを期待しています。

大学にはたくさんの扉があります。今年三月に卒業した一人の学生は、「高齢者施設に向けた音楽活動の心理的効果」をテーマに卒業論文を書きましたが、彼女の場合、大学の吹奏楽団の扉をたたいたことがきっかけでした。団員が二十人前後のこぢんまりとした楽団を通じて、その吹奏楽団が慰問演奏活動を行っている高齢者対象のデイケアセンターとつながり、そこで彼女は、自分たちの演奏を聴いて普段は全く笑うことのなかった認知症の方々が笑顔になり、手を動かすこともなかった人が踊りだし、また泣き出す人もいることを発見しました。そして、なぜだろう、という問いから出発して、彼女は、大学で学んだ心理学の研究手法を応用し、超高齢社会における、音楽療法の専門家とは異なるアマチュアの音楽活動の可能性について、彼女自身の結論を導いたのです。大切なことは、まず扉をたたくこと、そして、問いかけることです。その先には新たな出会いがあり、発見があり、新しい成長した自分が待っています。それが、尚綱の教育です。「可能性は心の中にある」というのが、十二年前、尚綱学院大学が発足した時のキャッチフレーズです。

では、尚綱の教育のめざす「心の中の可能性」の中核は何なのでしょう。先にも述べましたように、本学は、キリスト教の精神を土台とする人間教育を謳っています。これについて、尚綱学院の初代校長である、アニー・ブゼル宣教師は、**goodness** ということが大切だと説きました。北海道大学の前身である札幌農学校のクラーク博士は、**Boys, be ambitious!** と呼びかけたと言われていますが、ブゼルは **Be good!** と言いました。そして、次のように述べています。「私たちは金持ちであろうと貧乏であろうと、高い地位にいようと目立たぬ片隅で静かに働いていようとどうという違いはありません。しかし私たちが **good** である時、世界は初めて良き所となるのです」。

皆さん、どうでしょうか。**ambition** つまり大きな志は、**goodness** つまり良き志に裏打ちされて初めて、この世の中をより良くすることにつながるのではないのでしょうか。今日の世界情勢をみると、また地域の復興を考えると、私たちは、この、誰にとってもごく身近な言葉の持つ重みを、改めて、深くかみしめる必要があるように思います。本学の佐々木公明前学長は、二〇一三年の本学のコラムの中で、次のように述べています。

「被災地に立つ大学として、2人の学生の命が奪われた大学として、少なくない数の学生・教職員が被災した大学として、多くの同窓生が被災した大学として、東日本大震災の記憶を風化させてはならない。被災者、被災地に共感して、真の復興がなされるまで、人々に寄り添う人間を育て上げるのが、尚綱学院大学の、教育の真髄なのであるから。」震災で大きな被害を被った、その名取の地に立つ大学として、私たちは、この思いを、しっかりと、引き継いでいきたいと思います。

皆さんの学びを、教職員はもとより後援会や同窓会、地域の多くの人たちが応援しています。尚綱学院大学の学び舎に集う仲間として、心のうちに尚綱の **goodness** の伝統を共有しつつ、社会に貢献する志を持って、新しい大学の歴史を共に創っていきましょう。今日から始まる学生生活が、希望に満ちた、充実したものとなるように、そして皆さんのこれからの人生に、豊かな祝福を心から祈り、二〇一五年度入学式の式辞といたします。

2015年4月3日

尚綱学院大学学長 合田隆史